演劇創造

復　刊
第147号
（第57巻 第２号）
令和4年（2022年）11月15日発行

── 発行 全国高等学校演劇協議会 ──

〒732-0068 広島県広島市東区牛田新町1丁目1－1 広島市立広島商業高等学校　TEL 082-228-2481 FAX 082-222-0869
事務局長　黒　瀬　貴　之
ホームページ http://koenkyo.org/　　メール info@koenkyo.main.jp

第68回全国高等学校演劇大会（東京大会）審査の経緯

第68回全国高等学校演劇大会は、サブカルチャーの発信地として知られる「中野ブロードウェイ」が有名な東京都中野区の「なかのZERO」を会場に、7月31日（日）から8月2日（火）の日程で開催されました。

今大会の専門審査員は、劇団「第三舞台」を結成以降、作・演出を多数手がけ、岸田國士戯曲賞や読売文学賞を受賞されている他、エッセイスト、ラジオパーソナリティ、など多方面で活躍されている鴻上尚史先生、文学座の俳優として数多くの舞台作品に出演されており、声優やワークショップ講師などの幅広い活動の他、文化庁芸術家在外研修員として短期留学のご経験もある山崎美貴先生、FUKAIPRODUCE羽衣の全作品で作・演出・音楽を手掛け、芝居と音楽を融合した「妙ージカル」の独特な世界観で観客を魅了し、多彩に活躍している糸井幸之介先生、舞台美術家として数多くの舞台作品に携わり、読売演劇大賞最優秀スタッフ賞・同優秀賞や伊藤熹朔賞新人賞などを受賞されるなど、活躍も目覚ましい土岐研一先生の４名に担当していただきました。

また、顧問審査員として、四国ブロックから川田正明先生、近畿ブロックから松山正民先生、九州ブロックから上田美和先生と、生徒ともにそれぞれの世界の演劇を作り上げ全国大会出場の経験のある３名の先生方にお願いいたしました。

審査については、大会１日目の上演終了から毎日事前審査会を行います。また、各校の上演後にも審査員室で活発な意見交換が行われます。１日目、２日目と各日の上演に関する事前審査を経て３日目の上演終了後の審査会で最終的な賞が決まります。

審査会ではまず、優秀賞以上の４校を決める投票を行いました。審査員一人あたり４校に丸をつけて、結果を集計し、それを元に最優秀賞を１校、優秀賞３校を決めます。集計の結果、愛媛県立松山東高校が満票、青森県立青森中央高校が６票、大谷高校が４票、兵庫県立伊丹高校が４票となりました。その他に３校が票を獲得していました。単純な獲得票数ではなく、この結果を元にまず、最優秀賞の決定に向けて審議が行われました。審査員それぞれが、４票入れた中の１位と思われる学校を挙げて、その理由や評価する部分を挙げていきました。その結果、愛媛県立松山東高校と青森県立青森中央高校の２校に対象が絞られました。どちらの学校の作品も内容、劇構造が秀逸であり、タイプの異なる２作品に関して、様々な角度からの白熱した議論が交わされました。意見が拮抗し、審査は難航しましたが、最終的に愛媛県立松山東高校が最優秀賞に決まりました。次に優秀賞の選定は、青森県立青森中央高校が自動的に決定、他の２校についてはそれぞれの審査員の押す作品をその理由と共に挙げ協議しました。その結果、大谷高校と兵庫県立伊丹高校に票が集中し、優秀賞の３校が決まりました。

次に創作脚本賞については、まず審査員が１票ずつ投票し、その結果を元に、それぞれの作品の特長を挙げながら、脚本を読んだ印象、舞台にあがった時の内容など様々な視点からの議論が交わされました。その中で生徒創作という点で高い評価を受けた兵庫県立伊丹高校が受賞しました。

舞台美術賞については、高さのある舞台装置、シームレスな舞台転換、映像にも見えるSNS通話の表現、さらに音響や照明、インパクトなど総合的に評価された埼玉県立秩父農工科学高校に決まりました。

内木文英賞は、手づくり感、思い切りのいい表現などが評価され、茨城県立日立第一高校に満場一致で決定しました。

また、原則として最優秀賞を受賞した高校に授与される東京演劇大学連盟賞は愛媛県立松山東高校が受賞しました。副賞としてワークショップ講師を派遣されるため該当校のみならず、地区（ブロック）の演劇活動の活性化につなげてください。

今大会は、コロナ禍の全国大会として３年振りの一般客を入れた有観客の大会でした。上演ごとに拍手や笑い声、息をのむ空気感などが共有されることで、舞台と客席とのつながりを感じ、改めて演劇の力の大きさを感じた瞬間でもありました。様々な制約があり、大会直前の感染者数の増加など不安定な状況の中、多くの課題を乗り越え、全国の舞台に立った上演校12校全校が無事に上演を終えられたことに、上演校や大会運営の東京都の先生方、実行委員生徒、大会関係者の皆様の熱い思いやエネルギーが感じられました。来年の鹿児島大会で開催都道府県が１周し、節目の年を迎えます。状況が改善し、全国から多くの関係者や観客が集うことで演劇の楽しさを共有できる大会となるよう願っています。

【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】

愛媛県立松山東高等学校　越智優・曽我部マコト／作
『きょうは塾に行くふりをして』

【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】
（上演順）

大谷高等学校　水谷紗良・髙杉学／作
『なんてまてき』

兵庫県立伊丹高等学校　古賀はなを／作
『晴れの日、曇り通り雨』

青森県立青森中央高等学校　畑澤聖悟／作
『俺とマリコと終わらない昼休み』

北海道大麻高等学校　山崎公博／作
『Tip-Off』

大分県立三重総合高等学校
0-1MOVERMIE@FILTER13／作
『「ねえＭＡＭＡ…」～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～』

岐阜県立岐阜農林高等学校　西野勇仁／作
『衣』

栃木県立栃木高等学校　栃木高等学校演劇部／作
『GEKKO』

島根県立三刀屋高等学校　亀尾佳宏／作
『永井隆物語』

茨城県立日立第一高等学校　高野心暖と演劇部／作
『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】（上演順）

東京都立千早高等学校
嵯峨蜜柑／原案　西松悠香・賀東奏・浅岡勇矢／作
『７月29日午前９時集合』

埼玉県立秩父農工科学高等学校　コイケユタカ／作
『Brilliant Life』

【創作脚本賞】

古賀はなを　『晴れの日、曇り通り雨』

【舞台美術賞】

埼玉県立秩父農工科学高等学校　『Brilliant Life』

【内木文英賞】

茨城県立日立第一高等学校

第68回　全国高等学校演劇大会　審査集計表

日付	番号	ブロック	学校名	演目名	鴻上	山崎	土岐	糸井	松山	川田	上田	計	賞
7月31日（日）	1	東京都	千早	７月29日午前９時集合									優良
	2	関東	秩父農工科学	Brilliant Life									優良
	3	北海道	大麻	Tip-Off									優良
	4	近畿	大谷	なんてまてき	○			○	○		○	4	優秀
	5	近畿	伊丹	晴れの日、曇り通り雨	○	○		○		○		4	優秀
8月1日（月）	6	九州	三重総合	「ねえMAMA…」～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～									優良
	7	中部日本	岐阜農林	衣			○		○			2	優良
	8	四国	松山東	きょうは塾に行くふりをして	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	9	関東	栃木	GEKKO									優良
	10	東北	青森中央	俺とマリコと終わらない昼休み	○		○	○	○	○	○	6	優秀
8月2日（火）	11	中国	三刀屋	永井隆物語		○	○					2	優良
	12	関東	日立第一	なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？		○				○	○	3	優良

東京都立千早高等学校

埼玉県立秩父農工科学高等学校

北海道大麻高等学校

大谷高等学校

兵庫県立伊丹高等学校

大分県立三重総合高等学校

岐阜県立岐阜農林高等学校

愛媛県立松山東高等学校

栃木県立栃木高等学校

青森県立青森中央高等学校

島根県立三刀屋高等学校

茨城県立日立第一高等学校

「大会開催、おめでとうございました！」

木原　延昭

第68回全国高等学校演劇大会（とうきょう総文2022）は、令和４（2022）年７月31日(日)から８月２日(火)、東京都中野区にあるなかのZEROにて開催されました。今年の東京は一般観客も入場した３年ぶりのフル開催となりました。折しもコロナの第７波もピーク、感染者数は過去最多を更新するような毎日でしたが、上演校12校は無事上演を行うことができました。大変残念ながら生徒講評委員の２名の辞退はありましたが、会場は３年ぶりの開催の喜びをかみしめるような高校演劇を愛する人たちで埋め尽くされ、開催自体を祝福するようでした。

個人的なことで恐縮ですが、諸事情により僭越ながら閉会式の挨拶をさせていただきました（本来は開催県会長のお役目です…）。何を話そうかと大会中悩んでいましたが、挙句浮かんだ言葉は、「おめでとうございました」。普通ならば「ありがとうございました」という感謝の言葉を述べるべきですし、出場校のみなさま、東京の先生方、生徒委員のみんな、そして見に来て下さった観客のみなさま、等々、感謝してもしきれません。ただ、その気持ちより、すべての方に「おめでとう」、関係するみなさんと「おめでとう」を言い合いたい気持ちが強く沸き起こりました。

過去最多の感染者が出ている中での開催。出場校が上演できなくなったらどうしよう、何らかの規制が出たらどうしよう、などなど、大会期間中「どうしよう」の連続で胸が詰まる日々でした。それが無事1校も欠けることなく上演ができたのです、「おめでとう」以外の言葉はありませんでした。

開催県として準備段階から不安だらけでした。前年度の和歌山大会へ、東京からたくさんの教員・生徒で視察する予定でした。結局、生徒委員の視察はゼロ、教員も数名のみという、ほとんどの人が全国大会の様子を知らない中での準備。上演打ち合わせ会や生徒交流会なども見た人が一人もいない、そんな手探りの状態での準備を、生徒や先生方と進めてきました。しかし、全国事務局の先生方はじめ過去の開催県の先生方からは、温かい助言やアドバイスをたくさんいただきました。何とか全国大会の形として運営できていたとすれば、それはそれらの先生方のご経験に基づく的確かつ丁寧なアシストがあったからに他なりません。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

閉会式で次年度開催県の鹿児島県の方々とエール交換を行い、このコロナ禍でも脈々と全国で高校演劇のバトンが引き継がれていることを実感し、胸が熱くなりました。去年の演劇創造・和歌山大会特集号には、部門代表委員の出光智浩先生が「来年は講習会や交流会を含め、すべての行事ができることを願っております」とありました。東京では、めでたく顧問研修会以外は行うことができました。鹿児島では、次こそコロナ前の通常開催が行われることを心より願ってやみません。

最後に今一度、「大会開催、おめでとうございました！」。

（第46回全国高等学校総合文化祭《とうきょう総文2022》 演劇部門委員会 部門専門官）

「温かい委員の皆とともに」

塩　路　悠　旅

私は2021年の春から約１年半とうきょう総文に関わってきました。そしてこの１年半は本当に無駄なものではなかった、生徒実行委員会が本格的に始動した2021年の春頃からコロナ禍での約１年半の長丁場を乗り越えてきた今、そう実感しています。

冬に開催されたとうきょう総文のプレ大会にあたる南関東大会では、最初で最後の大会運営の練習の場でしたので、生徒一人一人がとても緊張していました。失敗してしまうところもありました。しかし、そこは皆演劇部員、前を向いてどうしたら全国大会では改善できるのか、大会終了後の委員会ではその点を密に話し合うことができました。しかしとうきょう総文は３年ぶりの有観客開催で、お客様を迎え入れるためには自分がお客さんになってみないと分からないことがあると私は思い、春の全国大会に（自腹で）行ってみました。全国大会の劇を初めて観劇したので劇にも感動しましたが、大会に行って一番感動したことは生徒一人一人の心構えが大変しっかりとしているということでした。何を聞いても丁寧に教えてくださったり、入口で笑顔で出迎えてくれたり、数多くの大切なことを学ばせていただきました。そして私はとうきょう総文をみんなが笑顔になれる大会にしようと思いました。

その思いを委員会で話したところ、皆それに賛同してくれて、大会３か月前からのラストスパートで、各仕事でより笑顔を生み出す方法を考えて実行してくれました。その甲斐あって、本大会では多くの方から「東京は最高だった」という声をいただきました。思えば委員の皆は一人一人が温かく、失敗しても励ましあったり、いいことがあったら心から喜んでくれるような家族のような存在でした。大会終了後の最後の委員会では、皆が楽しい大会だったと言ってくれました。

さて、とうきょう総文2022は上演校、生徒講評委員の皆さん、生徒実行委員の皆さん、審査員の先生方、顧問の先生方のご協力により、無事に終えることができました。本当にありがとうございました。

令和５年夏に開催される「2023かごしま総文」の成功を心よりお祈り申し上げます。

（生徒実行委員長　東京都立府中高等学校）

「生徒講評 PON! PON! PON!」

大　石　未　来

全国大会の帰り道、大会が終わったという実感がなかなか湧かず、未だ覚めない興奮を誰かに伝えたくてしかたがありませんでした。しかし、劇を見ていない人にどうやってこの感動を伝えれば良いのか……この疑問はすぐに解消されました。そう、生徒講評委員が書いた講評文を読んでもらえばいいのです！

私は今年の関東大会で生徒講評委員を初めてやらせて頂きました。生徒講評委員では、「高校生」が演じる劇を同じく「高校生」である委員達がどう受け止め、どう感じたのかを討論し、講評文にまとめます。そこでの討論がすごく衝撃的で、色んな人の考え方や感じ方を深く知れてとても感動しました。なので全国大会の生徒講評にお声がけいただいた時は本当に嬉しかったです。

月日は矢の如く、気づけば大会前の事前研修の日となっていました。ドキドキしながら会場へ向かい、顔合わせをして、研修を行います。研修中はさらに時間の流れが早く感じて、あっという間に大会初日に……！そこからは怒涛の３日間でした。劇を見て討論、劇を見て討論をひたすらに繰り返し、アドバイザーの先生から助言をいただいて、また劇を見て討論します。

その中でも一番記憶に残っているのが「話がとっちらかっている」というものでした。良かった点を色々話し合うのもいいが、じゃあその良かった点を受けて自分達はどう感じたのか、もっと言ってみたらいいのでは。アドバイザーの先生はそうおっしゃいました。私はこの言葉に強く感銘を受け、そこから少しずつ自分がどう感じたかを言葉にしていくよう努力しました。言語化はとても難しかったですが、言葉にする大切さを学ぶことが出来ました。

また、緊張して硬くなってしまっている委員達を「PONPONPON ～！」とEXITのネタで何度も先生方が励まして下さいました。お陰で委員達は楽しみながらこの生徒講評に挑めたと思います。

生徒講評委員として全国大会に来られて本当に良かったです。来年のかごしま総文も無事に開催され、生徒講評を通して演劇の楽しさに目覚める人が増えたら良いなと思います！

（生徒講評委員長　工学院大学附属高等学校）

観客と出会うことが演劇の命

鴻上　尚史

コロナ禍で、感染者数が世界一という加速する状況の中、３日間、無事に上演が終わったことは、奇跡と言っていいと思います。本当によかったです。

３年ぶりの有観客上演ということで、とても感動的な大会でした。客席のさまざまなリアクョシンは、舞台の上の演者達を刺激するだけではなく、観客そのものも刺激しました。

分断と不寛容が加速する時代ですが、同じ空間の同じ時間に、同じものを見て笑い、同じものを見て泣き、同じものを見て声を上げることは、「私達は、絶望するほど分断してはいない。私達は、同じ感情、同じ判断をすることもあるんだ」という、小さな、けれど確実な希望になると感じました。

だからこそ、2020年2021年に高校２年生、３年生だった生徒の心情を思います。作品を見ながらすすり泣く若者が客席にたくさんいました。この無念は、日本中の、いえ、世界中のさまざまな人々が感じた感情です。この感情の重みに耐えながら、前を向いて進もうと思います。

一校ずつ、感想を語ります。

東京都立千早高等学校『７月29日午前９時集合』。

まず何が素晴らしかったかというと、演技する場所を舞台の一番前にしたことです。

他の多くの学校は、緞帳の後ろに装置を作りますから（そうするしかありませんから）、大劇場の場合、緞帳が舞台の前から一間から一間半ぐらい後ろにあることが多いです。

そうすると、舞台全面から３メートルぐらい奥で一生懸命演技することになるのです。

これは、なかなかリアルに伝わらないのですが、舞台全面、つまり最前の観客と１メートル（コロナ禍の場合は２メートル）離れて演技する場合と、最前の観客から４メートル（コロナ禍の場合は５メートル）離れて演技する場合では、印象はまったく違うのです。

それは、40年間演出家をやっている僕には切実な感覚なのです。

舞台の奥に行けば行くほど、迫力が消えます。顔の表情が見えにくくなります。声の大きさが削られます。全体の印象が弱まります。それはとてももったいないことなのです。

千早高校は、机と椅子を動かして、わざわざ舞台の一番前に持ってきました。彼女達の演技が、とても面白く、心に届いたのは、彼女達の達者な演技もありますが、この場所の力でもあるのです。

ただし、一番前だと照明が暗くなることが多いです。そこは、なんとか調整しないといけません。もし、舞台の一番前が暗かったら、せめて、半間後ろを演技の中心にするといいでしょう。

千早高校の作品は、印象的なセリフもたくさんありました。「私は歯磨きしながら、泣いた」にはずきんとしました。ただし、３人の特徴をもう少し書き込めばよかったと思います。そうすれば、モノローグも、それぞれの心情が際立ったでしょう。でも、じつに自然体で好感の持てる戯曲と演技でした。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『Brilliant Life』

まず、その装置に圧倒されました。赤いライトのオープニングからタイトルの出方は素晴らしかったです。

そして、LINEを交換する各部屋の描写の巧みさ、素早さは感動的でした。

また、教室にＡＩが１人配置されていて、コミ障の人を助けるという設定もとても面白いと感じました。

Ｂライフの希望が重なった所から、物語はとても面白いものになりましたが、それ以前は、少し対立が弱くて、散漫に感じました。

また、音楽が終わったらすぐにライトインしたらいいのにと思う場面が何カ所かありました。テンポのある曲の場合は特に、２×８（ツーエイト）の終わりで明かりがつくとスタイリッシュな装置に対応して、より素敵になったのにと思いました。

北海道大麻高等学校『Tip-Off』。

コロナ禍で全道大会が中止になって、ただ２試合だけの代替大会が開かれる、そこでの対立という視点が、まさに素晴らしく、切なく、胸に痛いものでした。

全道大会なら、ベストメンバーでいく。でも、代替大会なんだから、みんな平等に出してあげたい。そう思うキャプテンと、どんな試合でもベストを尽くすべきだと思う親友京介の対立。胸に迫るものがあります。

ただし、ドラマがぐっと動き、迫力を増し、感動的になるのは、後半の車椅子に乗った京介がボールを投げた瞬間からです。それまでは、浩太と京介のドラマは明確な対立が生まれていません。京介の事故を、京介か浩太か、どちらかでいいので「自分（お前）のせいかもしれない」と誤解すれば、話はもうひとつ深くなったのではないでしょうか。あと、進展が丁寧すぎるのも惜しいです。浩太と京介が２人になりたい時は、周りの女性が去ればいいのですし、新聞記者はあんなに丁寧に自己紹介する必要はないと思います。その時間は、ドラマが何も進んでいませんから。

でも、コロナで中止になった総ての人に捧げる、本当に痛切で感動的なドラマでした。多くの生徒が泣きました。

大谷高等学校『なんてまてき』

高校の演劇部というより、吉本か松竹の高校部の人達かと思うぐらい、キャラクターが際立った素晴らしい上演でした。

物語も、「反省文の提出を命じられたのに、小説を書く女子高生」というスタートが素晴らしいです。

ただ元気すぎて、何を言っているのか、とても面白いことを言っているはずなのに、うまく聞き取れなかったことがとても残念です。とくに、大きなホールになると残響音が大きくて、聞き取りにくくなるのです。

親から「反省文を書き続ける。でもどんなに書いても決して許さない」という痛切な設定なのですが、台本をよく読むと、「お母さんと血がつながってない」という文章と「お母さんは悪魔にのっとられた」などの表現があって混乱しました。

また「夜の女王」が母親のメタファーになれば、つまりは母親との関係性を描くことができればよかったと思います。でも、登場人物はみんな本当にうまくて、面白くて、素敵でした。夢に出てきそうでした。

兵庫県立伊丹高等学校『晴れの日、曇り通り雨』

友達とはなんだろうという痛切なテーマをじっくりと見つめた、本当に素敵な作品でした。「友達にならなくても幸せになれるこの時代に、私は友達になりたい」という表現がまさに「今の感覚」を表していると思います。この作品を書いた３年生の古賀はなをさんは本当に才能ある人だと思います。創作脚本賞に相応しい作品でした。

登場人物を演じた人達も、じつに達者で、リアルな感覚をちゃんと演じていました。そこには、なんの嘘もない、等身大の真実がありました。

大分県立三重総合高等学校『ねえＭＡＭＡ...』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～』

じつに大きなテーマに取り組んだ作品でした。ただ、冒頭の教室のシーンは、真実の感情を表すというより、集団ダンスのようで、感情のやりとりをあまり感じませんでした。祈る三角形の形が不気味ですから、そこだけ、とても様式的な演技にして、それ以外はナチュラルな動きでよかったのではないかと思います。

実際、母子のお金がないという会話など、少人数になった時には、ちゃんと真実の感情の交換を感じました。また、雪村先生の最後の演説もじつにリアルで迫力があり、真実の感情に溢れていました。一本の作品の中で、感情より動きを重要視する場面と感情を一番にする場面が分かれるのはもったいないと感じます。

でも、映像や装置など、じつに迫力があり、不気味でよかったです。また、歌もとても素敵で、上手だったと思います。

岐阜県立岐阜農林高等学校『衣』

常連校の重圧をとてもリアルに描いていたと思います。第三世代はもちろんですが、先輩もすべてリアルで達者な演技でした。

全国大会をメロン、演劇をすることをマクワウリとする対比がもうひとつ表せられるとよかったと思います。この作品もまたコロナ禍の悲しみを描きました。その悲しみは真実で、じつに切なく胸に響きました。

愛媛県立松山東高等学校『きょうは塾に行くふりをして』

作品として完成しています。劇作としても劇構造としても何もいうことはありません。あ、ひとつあ

るとすると、箱がガタガタすることと、それにけつまずいて倒れることの因果関係がちょっと分からなかったです。でも、それ以外は言うことはありません。キャラクターもそれぞれに見事でした。

栃木県立栃木高等学校『ＧＥＫＫＯ』

男子校らしい楽しい上演でした。みんな、楽しくてバカバカしくて、熱くてよかったです。ただ、物語が動き出すのは、手紙を読み出す所からです。その前が少し希薄なのがもったいなかったです。

でも、エネルギーは最高でした。キャラクターも面白く、本当に楽しい上演でした。

青森県立青森中央高等学校『俺とマリコと終わらない昼休み』

傑作でした。劇構造も劇作も演技も、注文をつけることははありません。これが最優秀作品になっても何もおかしくはありませんでした。そうならなかったのは、審査員の趣味嗜好としか言えません。審査を人間がしている限り、そういうことは起こります。でもこれだけははっきりしています。本当に傑作でした。

島根県立三刀屋高等学校『永井隆物語』

見事な集団の演技と、物語の中心を担う人達の達者な演技で素晴らしい作品でした。願わくば、永井と看護婦との２人の会話のように、モノローグの説明ではなく、対話の中で進んでいくシーンがもっと多かったらよかったと思います。また、演技をする椅子がとても奥に置かれて、もっと前に置いたらと思いました。でも、被爆の瞬間とか見事な身体表現が多くて感動しました。

茨城県立日立第一高等学校『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

楽しくてバカバカしくてごきげんな作品でした。ただ、ランウェイを歩いて来るシーンなど、なぜもっと舞台全面までこないのかともどかしく感じました。演劇を壊して、いろいろと遊んでいるのですから、舞台の真ん前まできてアピールしてもいいのにと残念でした。キャラクターがそれぞれに際立っていて、本当に面白い作品でした。楽しかったです。

以上です。今年は名作が多かったと思います。じつに充実した年でした。来年もまた有観客で上演できることを祈ります。

（作家・演出家）

素敵な作品をありがとうございました

山崎　美貴

第46回全国高等学校総合文化祭東京大会、第68回全国高等学校演劇大会の開催、そして無事の閉会おめでとうございました。12校それぞれが時間をかけて丁寧に芝居を作り上げてきた様子が目に浮かび、胸が熱くなりました。

東京都立千早高等学校『7月29日午前9時集合』

高校生の日常風景を切り取ったような会話と、本の引用や言葉遊びのセンス。人との関わり方、若者たちが抱えている社会や未来に対する不安。声や雑音が重なり合う場面やスマホを見ながら投げかける心の声。何事もなく気楽に日常をやり過ごしているように見える高校生の心の中の揺らぎを見せてもらったように思います。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『Brilliant Life』

オープニングの赤い照明、転換や効果音、椅子を使ったアクセントある動き、LINEのシーンも工夫があって楽しかったです。なかなか決められない進路。友達の意見に翻弄されたり、裏切り行為があったり、揺れ動く不安定な心理をそれぞれが個性豊かに表現していたと思います。感情を持たないAIのアイコにヒヨリが個人的感情を抱くとシャットダウンしてしまうという少し切ない関係。感情を持つ人と人との繋がりこそ、かけがえのないものなのだ、と。

北海道大麻高等学校『Tip-Off』

バスケ部の浩太と京介。友情は些細なことで壊れてしまう。事故に遭いバスケが出来なくなった京介と、コロナ禍で大学に通えずバイトに明け暮れバスケをあきらめてしまう浩太。それぞれの苦悩や再会までのドラマをより深く見たいと感じました。コロナ世代に生きる若者たちの不自由さや彼らの失った時間は取り戻せるものではないけれど、ラストの夕焼けはとても美しく、希望ある未来へと繋がる感動的なシーンでした。

大谷高等学校『なんてまてき』

パワフルな動きとテンポのいいセリフで独創的な世界を作り上げていたと思います。鹿毛野の母親に対する恐怖、父親への思い、許してほしい、助けてほしいという心の叫びがキャラクターたちを生み出し、行方不明になった心を紐解いていく。たみよとみなこ、迷子の少女たち、母親への恐怖が生み出し

たかのような夜の女王、それぞれが強烈に心に残りました。少しの勇気と手を差し伸べる誰かがいることで、重たい枷が外れ時間が流れ出す。その一歩を踏み出せない人への力強いメッセージとなったのではないかと思います。

兵庫県立伊丹高等学校『晴れの日、曇り通り雨』

シンプルながらその場の風景がイメージできる素敵なセットでした。人との距離感、友達付き合いが苦手な３人のキャラクターがそれぞれ愛おしかったです。花壇への入り方や道具の使い方で、植物を愛する夏樹が花壇を大切にしている様子がよくわかりました。愛と夏樹の関係性や心の変化も繊細に表現され、一のキャラクターや名言の引用もとても面白く、芝居に色を添えていました。３人が結託して生物部の小林を追い返すなど、知らず知らずに心地よい関係性と時間を作り上げていく姿が素敵でした。

大分県立三重総合高等学校『ねえMAMA…』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～

セットや照明の使い方が場面ごとに工夫されていたと思います。舞台中央の大きな三角形のシンボルマークが不気味な存在感を放ち印象的でした。管理された社会で生きていく人々。決まりと思って何も疑問を持たず反射的に祈りをささげ、闘いを放棄し、あきらめてしまう。多様化が進む社会の中、自分の置かれた立場だけではなく、いろいろな角度から物事を捉え、世の中を理解して闘っていかなければならない。ラストの雪村の言葉は力強いメッセージとして心に残りました。

岐阜県立岐阜農林高等学校『衣』

群衆での動きが洗練されていて、場面変化のアクセントとして効果的でした。先輩から後輩への引継ぎ、演劇部の存続のプレッシャーを抱え、ぶつかりあいながらも絆を育て後輩から先輩へと成長していく登場人物たちの姿に、こんなにも熱心に情熱を傾けたものがあっただろうか…と、自分の高校時代を懐古。伝統野菜のマクワウリに丁寧に水をやり育てるのと同様、仲間とともに困難を乗り越え稽古して演劇を育て伝統を守る。これからも先輩から後輩へと受け継がれていくのですね。

愛媛県立松山東高等学校『きょうは塾に行くふりをして』

コメディ要素がふんだんに盛り込まれ、登場人物たちも生き生きとしていて、台本も演出も秀悦な作品だったと思います。スローモーションも丁寧に作られ完成度が高かったと思います。次々と起こるアクシデントに何とか対処しながら進めていく部員たち。棄権しようとあきらめかけた時、ふと語った助っ人ミナト君のスピーチはグッと心に響きました。

栃木県立栃木高等学校『GEKKO』

それぞれのキャラクター設定がとても面白かったです。生物部の部室も細かく再現され、オタク生物部男子の日常を覗き見したような楽しさがありました。マスクでお顔が見えなかったのが残念でした。美月からのハガキに興奮する男子たちの姿は、登場しない美月の儚げな可憐さを私たちに想像させてくれました。会いたい人に会いに行こう、そしてラストの満月と雪とスノードームは「これぞ男のロマン！」という感じで清々しかったです。

青森県立青森中央高等学校『俺とマリコと終らない昼休み』

何気ない教室の風景が、突然ミサイルで破壊される。いじめのスパイラルから逃れられないマリコの作った世界。いじめの恐ろしさと、誰かがそれに気付くことで状況は変化していくということをテーマに、ドラマティックで見応えのある作品に仕上がっていたと思います。生徒一人一人が繰り返される場面を微妙な変化を加えながら緻密に作り上げていて、演技も演出も素晴らしかったです。

島根県立三刀屋高等学校『永井隆物語』

衣装や照明、セットの色合いも落ち着いた感じで素敵でした。群衆の動きが背景を作ったり、同じセットの中で様々なシーンを上手く表現していたと思います。終盤にかけて群衆が語るセリフは、力強く重く心に響きました。バックライトの中、人々が爆音とともにスローモーションで倒れていく場面は、とても美しくもありとても悲しく印象的でした。永井隆の人生を短い時間で簡潔にまとめてあり、多くの人々に知ってもらいたいと思う作品でした。

茨城県立日立第一高等学校『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

クラス内で出身県によるカースト制度に奮闘する各都道府県の生徒たち。地元への愛や家族への愛、設定や各県の生徒のキャラクターもそれぞれ面白く、言葉選びのセンスも良く、楽しい作品でした。ポップな色彩や、小道具や衣装の使い方、高校生が手作りで楽しんでいるという感覚が伝わり、好感が持てる作品でした。

（俳優）

未来へ繋ぐ希望

土岐　研一

予想通り全て高いレベルの作品ばかりでした。

１つの要素でも突出した作品が多く、また最初と最後の舞台の絵をとても意識して創っていることにとても感心しました。

7月29日９時集合

淡々と日常会話の進む中、時折入る"事実"と"心の呟き"を織り混ぜた客席への語りかけは非常に効果的。マスクを取るくらいの真摯な叫びが１つでもあれば、劇的効果が高まり更なる共感を得るかもしれない。

装置では机と椅子の積み上げの配置・体裁に工夫が見られるが、照明にもう少し強弱があればより良い雰囲気が作れるように思う。

最後に出てくる欠席した女性徒１人のシルエットが心に深い余韻を残す。

Brilliant Life

卒業後の進路について悩む高校生達の関係がこじれていく様が面白い。そしてクラスメートに扮した人型AIと主人公の女の子の関係もドラマ性を高めている。

オープニングが秀逸。美術・照明・音響のチームワークが作る空間と蹌く生徒に心を掴まれる。

中央のモノリスのサイズが圧巻で最初の机の積みあげもAIを思わせる造形にして効果大。そしてスマホの場面での予想を上回るモノリスの使い方も最高です。

音響のテンポと選曲が良く、それと相まって弱いセミの鳴き声のアクセントも効いている。

転換もシームレスで舞台美術賞も納得。

Tip-Off

主人公の２人の男子が疎遠になった理由に少々物足りなさを感じるものの、自然な２人の歩み寄りの場面は素直に心に染み入る。

教室の壁の形状に工夫が感じられ、ドア外芝居も見えやすく、教室奥側の物置感も説得力がある。

舞台を前・中・奥の３エリアに分けたことにより、回想シーンが重層的に見えるのはバスケットボールの上手い使い方も相まって見事な手法。

もう少し机の存在感を消すべき場面で消えていれば、一層作品の質が上がると感じる。

オーラスの全員のTip-Offのシルエットがとても綺麗に映える。

なんてまてき

反省文と創作文が入り混じり、孤独な少女の闇を炙り出すダークな衝撃作。後半に明かされる２人の友達の正体に感動すら覚える。

もう少しセリフが聞きやすければ、さらに素晴らしい作品になる

背景の上手の布はとても良く形造られているが下手側の造形にもう少し手を加える余地がある様に思える。衣装のセンスがとても素晴らしい。

照明と音楽の選曲は全編通して見事に雰囲気作りに貢献して、最後のペンカフェの楽曲は個人的に萌え。

晴れの日、曇り通り雨

高校生活における友達作りの難しさと脆さを晴れやかに描いた良作。

美術の配置が舞台上に目一杯広がっていて役者の動きの幅を広げているのは高評価。

そしてベンチ脚元のヨゴシ処理の細かい配慮に感心するも、花壇を表す黒い線が記号的で少々残念。

本物のレンガなどが１列１段でもあれば美術全体の調和に繋がるかもしれない。

雨の場面でとても良い雰囲気を作ったホリの照明色のセンスに脱帽。そしてオーラスの花壇に佇むカカシの絵が絵葉書になるくらい美しい。

『ねえMAMA…』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～

未来、格差社会に向き合う高校生の真摯な心と絶望に抗う姿に胸を打たれる。役者陣の熱演に感極まる。

未来の権力を象徴的に表現し、舞台をエリア分けして効果的に使い、転換を意識させない美術は絶妙。映像も説明的でなく、さらりと雰囲気作りに一役買って好感が持てる。歌詞の映写はやや説明すぎると感じるが、思いを乗せた熱い歌声が圧倒的に心に響く。

衣

伝統を先代から受け継ぎ、次世代に渡す演劇部の高校生達の心の葛藤が輝きを放つ。

語りで話をコントロールしつつ、見せたい&聞かせたい重要な場面はしっかりと創り見応えあり。

アカペラを効かせる場面は特に印象に残る。

素舞台を集団歩行演舞のごとく大きく効果的に使い、２つの店を必要最低限で見せたカラクリ転換は好印象。

きょうは塾に行くふりをして

脚本はただのリハーサル風景を描いた作品かと思いきや、スタートから会場全体を巻き込むメタ構造になり興味と笑いで惹きつけられる。

テンポとタイミングが非常に良く、人物の演じ分

けも鮮やかで俳優陣が大健闘。

後半のシリアスなドラマが前半のコメディーにより更に輝きを放つ。

美術・照明・音響はこの作品の中ではまるで登場人物のような活躍で魅力が増す。

脚本が他の要素によりここまでの作品になるという総合芸術の生きた見本のような作品。

GEKKO

オープニングの詩的なおとぎ話から、細かく飾り込まれた生物部部室へといざなう導入部分は見事。

カマキリの衣装があまりにも突出しすぎて、他の部員のそれぞれの個性的な設定と全体的な面白さが少々損なわれた印象を受ける。

それでも楽しい生物部室を覗き見できたのは満足。

そして印象的な舞台面での箱照明のエピローグを経て現れた満月の場面は魅力的。

GEKKOも恋に落ちる納得の美しさで効果的なエンディング。

俺とマリコと終わらない昼休み

タイムループの謎解きから、個人のいじめ問題に落とし込む話の流れは鮮やか。

イジメを非難した後の気まずい静寂とそれを破る一言の本音が爆弾よりも恐ろしい。

椅子と机と教卓の必要なもの以外削ぎ落とした教室に、人物像が露にされて凄みを感じる。

作品の持つ劇的性と生徒たちの熱量は一、二を争うレベルの高さで熱く心に焼きつく。

爆発場面の照明・音響効果が観客の五感を震わせるほどのインパクトであればどうなるだろう、と今も考える。

永井隆物語

永井隆の人生を良く調べながらもストーリーはただの人生描写にとどまらず、しっかりと演劇的手法を用いた恐ろしく完成度の高い作品。

時々入る語りに加え、群像も舞台上に配置してシームレスに話を紡いでいて渋い演出力を感じる。

オープニング後の白衣を着る登場場面から印象的なシーンの連続で全編通して魅了され続ける。
俳優の演技に説得力があり、特にみどり役は第一声から惹き込まれる。

デザインは全て圧倒的。構図・調和・洗練さに加え、静謐さの凄みもあり高校演劇の域に収まらない。

なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？

茨城出身のカースト最下位の生徒の奮闘記。

演技の勢いとテンポがスゴ過ぎで、キャラの演じ分けが鮮やか。

ホリの照明色が潔くビビッド。フランスのファッション雑誌のようなおしゃれな印象でダサい県のセンスとはとても思えない。

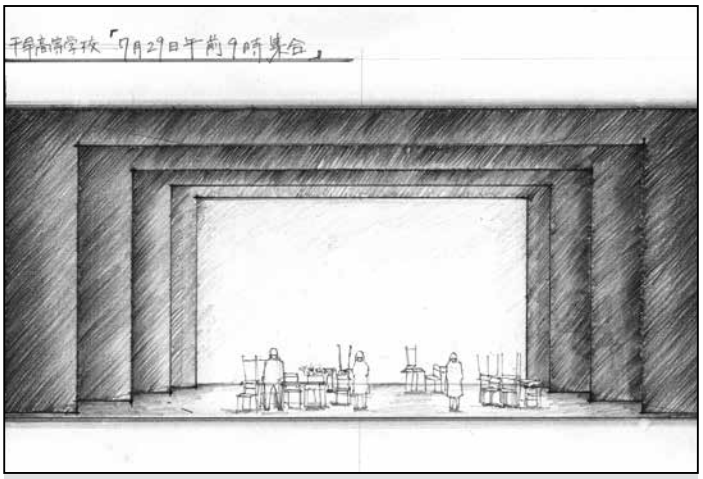
小道具・衣装もとてもクリエイティブでダサうま感MAXで観客美術賞（そんなものがあれば）に値する。

最後に、一演劇人として若い世代の演劇人口が減少している現実を憂いていく中で、この大会の熱気を感じました。大袈裟かもしれませんが未来につなぐ希望が持てました。

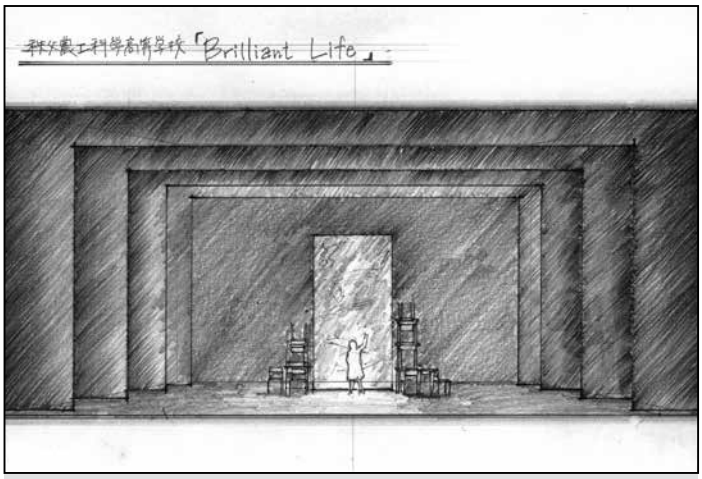
ありがとうございます。

（舞台美術家）

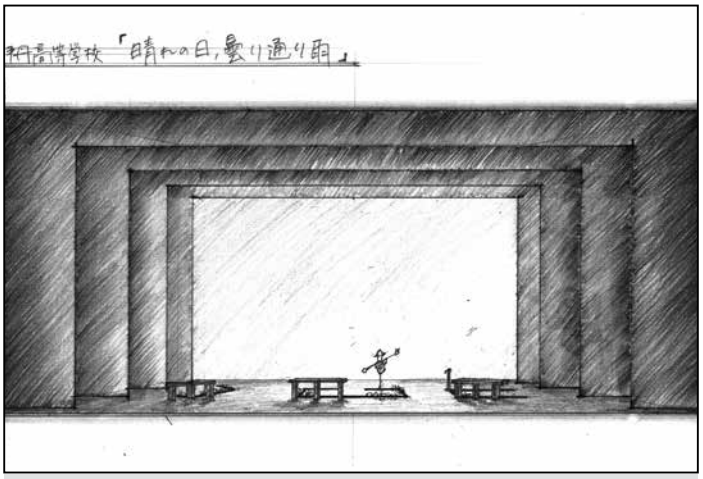
第68回 東京大会



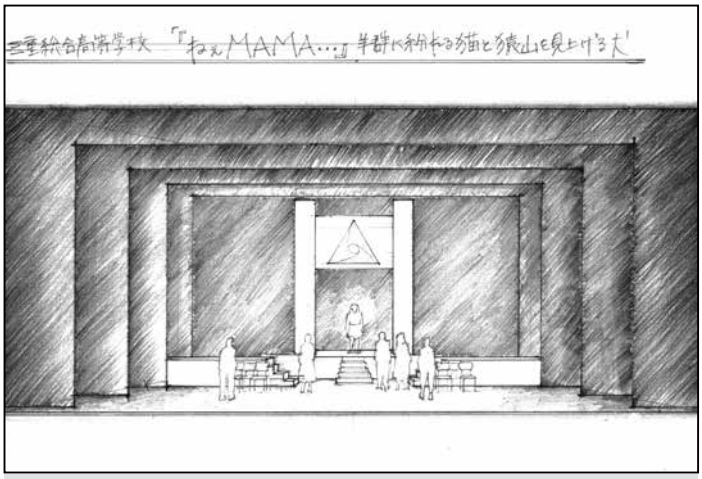
東京都立千早高等学校
『７月29日午前９時集合』



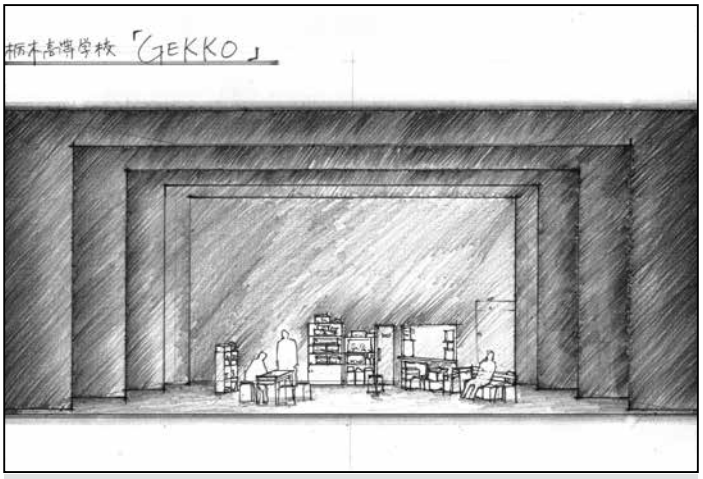
埼玉県立秩父農工科学高等学校
『Brilliant Life』



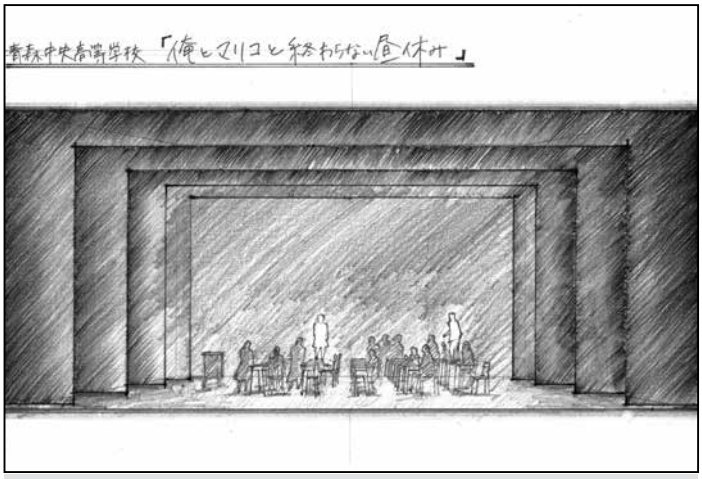
兵庫県立伊丹高等学校
『晴れの日、曇り通り雨』



大分県立三重総合高等学校
『「ねえMAMA…」～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～』

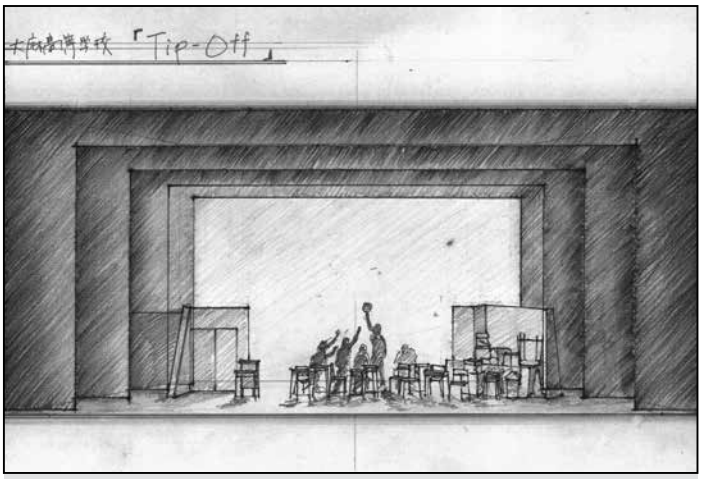


栃木県立栃木高等学校
『GEKKO』

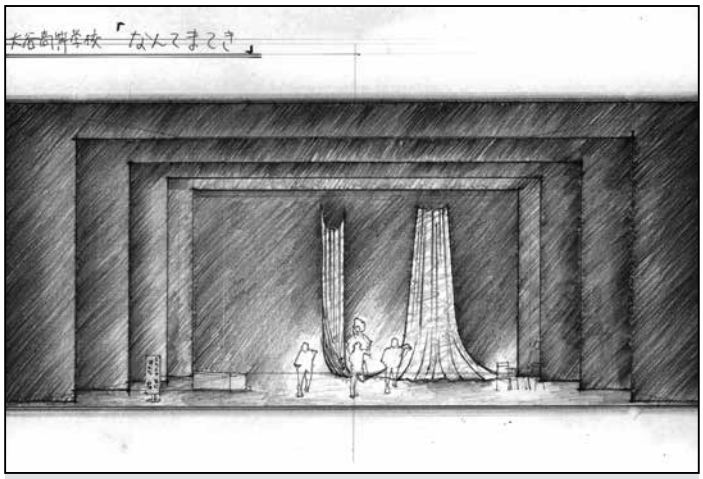


青森県立青森中央高等学校
『俺とマリコと終わらない昼休み』

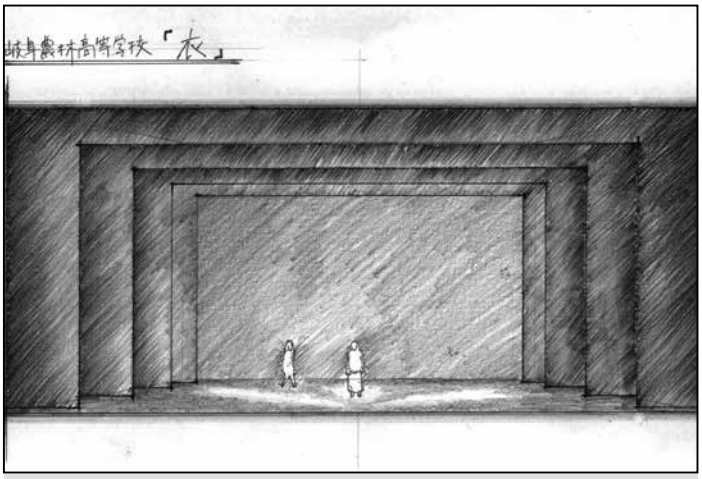
舞台図



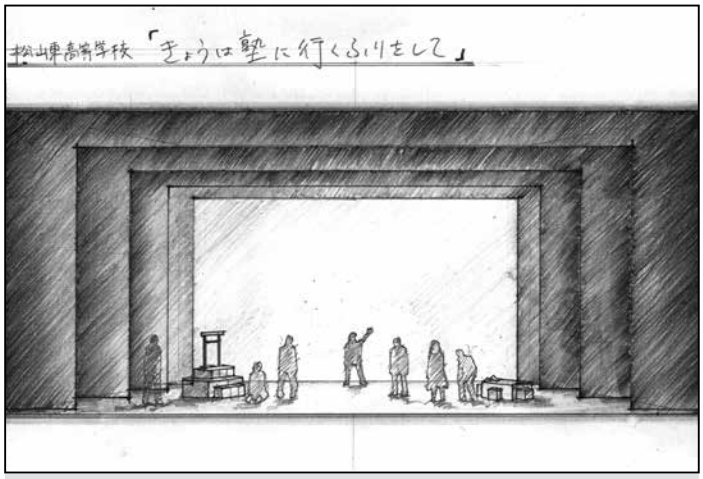
北海道大麻高等学校
『Tip-Off』



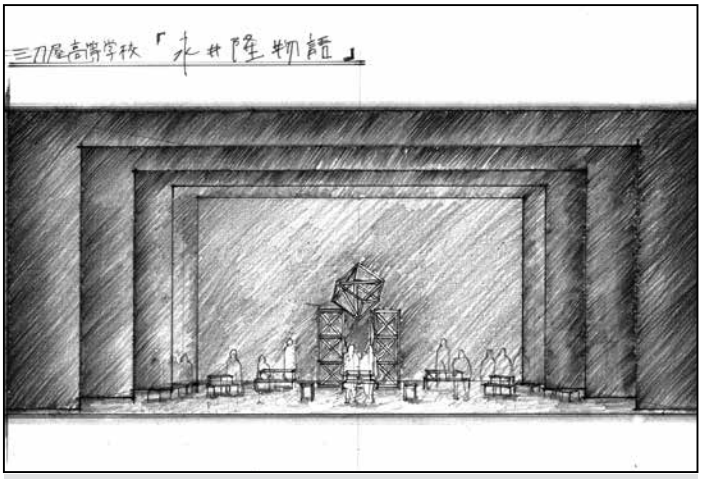
大谷高等学校
『なんてまてき』



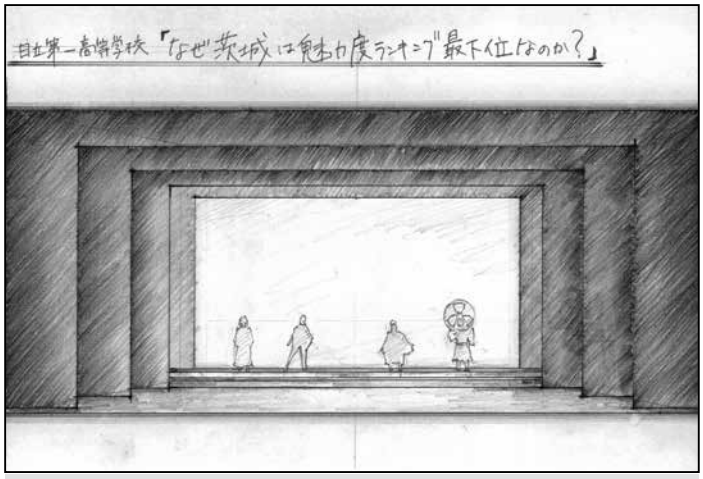
岐阜県立岐阜農林高等学校
『衣』



愛媛県立松山東高等学校
『きょうは塾に行くふりをして』



島根県立三刀屋高等学校
『永井隆物語』



茨城県立日立第一高等学校
『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

高校生の声と演劇

糸井幸之介

３日間、全12校の作品を一気に観て、その後数日、頭と心がぼーっとしました。劇場で響いた高校生たちの声が私の中で残っていたのです。優しくて、正直で、懐かしいような、胸の奥がチクッとするような、なんとも言えない残響でした。

もしかしたら、こんな風に響く声と演劇というものは取り合わせが良くないのかもしれません。役を演じるということも、作品にテーマや意味を持たせるということも、この声の響きの前ではなんだか白々しくなってしまいます。

これは高校演劇に限らず、演劇全般に言えることかもしれません。俳優の生身の人間の魅力と、演劇の言葉や意味の面白さというのは、いつだってあんまりしっくり噛み合わないものです。しっくり噛み合わないものをなんとか馴染ませ、あわよくば相乗効果みたいなものが生じて、思いもよらない凄い作品にならないものかと、全ての演劇作品は悪戦苦闘していると思います。

高校生たちの声というのは、生身の人間の魅力の純度の高い結晶のようなものです。演劇にとって取扱要注意の劇薬かもしれません。だからこそ、どの作品からも、そんな演劇ならではの悪戦苦闘がより色濃く感じられ、とても興味深いものでした。

東京都立千早高等学校『7月29日午前９時集合』

高校生３人の日常会話が小気味良い作品でした。いかにも今の若者という記号的なキャラクターではなく、自然体で自分たちを描いていると感じました。話題も丁寧に構成されていて、いつまでも聞いていたくなる空気感でした。作品は次第に社会的な問題を孕むのですが、そもそも問題意識がある人だけがキャッチできる問題提起のような、若干の分かりにくさを感じました。

埼玉県立秩父農工科学高等学校『Brilliant Life』

舞台美術が印象に残る作品でした。序盤、世界観や設定の中で俳優たちが少し窮屈そうでしたが、物語が進むにつれて、一人ひとりが生き生きと感じられるようになりました。就職にまつわる題材と、A.Iに恋をするという題材が、それぞれ孤立している印象を受けました。二つの題材がうまく絡めば、より観客を引き込むことができたと思います。

北海道大麻高等学校『Tip-Off』

卒業生が数年振りに母校を訪れるという設定は、多くの作品が取り入れたコロナや学校というモチーフにまた違った陰影を与え、ほろ苦いノスタルジーを感じさせました。コロナと事故により車椅子になってしまうという不幸に別の不幸を重ねるストーリーは、簡単に悲劇の度合いを強めてしまっている印象を受けました。

大谷高等学校『なんてまてき』

反省文を書こうとしたら物語になってしまった物語という劇構造により、シュールなイメージ世界と、主人公の抱える内的な問題を、軽やかに横断していました。沢山の言葉を、自由な発想で、全身を使って力強く喋っていく俳優たちは皆芸達者でスターのように輝いていました。スピードが速く聞き取れなかった言葉たちも、空間に放たれた舞台美術のようにしっかりと存在していました。

兵庫県立伊丹高等学校『晴れの日、曇り通り雨』

独特な感触がありました。予め考えた方針としての感触ではなく、稽古を通じて俳優や作家から滲み出るものを丁寧に編んで行くことで生まれた感触だと思います。登場人物は皆、キャラが立っているのに角が立っていない、自然な人間味を感じました。俳優の声の響きや会話のリズムも、無理がなく、自然体をひけらかすような嫌味もなく、絶妙なバランスで優しいグルーブを生み出していました。

大分県立三重総合高等学校『ねえMAMA…』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～

管理社会、階級制度、信仰心を利用した統治、等の難しい題材に果敢にチャレンジしている作品でした。演技もスタッフワークも、大きな世界に観客を引き込もうという力強さを感じました。しかし、力技で引き込むには限度があります。もう少し余白やシンプルさを持って構成し、余裕や無駄も散りばめながら演出したら、より観客は引き込まれたと思います。

岐阜県立岐阜農林高等学校『衣』

伝統ある演劇部員が背負う重圧や悩み、コロナにより大会が中止になってしまったこと、岐阜農林高校の演劇部員にとってこの二つの題材はとてもリアルなものだったのだと思います。真心を込めた一つ一つの描写は、強い説得力を感じました。しかし作中では、リアルであるはずのこの二つの題材が今一歩効果的に繋がらず、焦点がぼやけてしまった印象を持ちました。

愛媛県立松山東高等学校『きょうは塾に行くふりをして』

何から何まで巧いと唸りたくなるような作品でした。台本の構成も、空間の使い方も、無駄がなく力みも感じさせないしなやかさがありました。俳優たちの存在感もしなやかでお洒落で、全員のことが好きになりました。観客が安心して、笑い、泣き、爽やかな後味を残して終わる、これ以上ないくらい理想的ですが実際に作るのはとても難しい演劇だと感じました。

栃木県立栃木高等学校『GEKKO』

男子高校の演劇部らしい、呑気さと奥ゆかしさが漂う作品でした。もうちょっと図々しく作っても観客にはちょうど良いくらいかもしれません。でも皆で楽しそうに演じている姿は見ていてとても心地良いものでした。

青森県立青森中央高等学校『俺とマリコと終わらない昼休み』

凄い作品でした。高校演劇という前提で語る必要が全くないクオリティーがありながら、高校生であることの意味や魅力が詰まっていました。構成に無駄がなく、演出に切れ味があり、俳優は情熱的で、社会性も同時代性も備わっていて、どうしたらこんな風に作れるのだろうと嫉妬と憧れを感じました。余韻も凄くて、観てからしばらく経ちますが、主人公二人の声や姿は今も頭の中に残っています。

島根県立三刀屋高等学校『永井隆物語』

実際に戦中戦後立派な活動をした人物を描いているのに、偉人の伝記にありがちな硬さや説教臭さがなく、新しい、柔らかい資料演劇という印象を持ちました。戦争を題材にした演劇のクライマックスの盛り上がりの見せ方という点で、既存の戦争演劇の方法に寄った印象を受け、少しだけ柔らかさが損なわれてしまったと感じました。

茨城県立日立第一高等学校『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

スクールカーストと県の魅力度ランキングを重ねる発想は、競争社会がもたらした人間の現状を顧みると、安易に笑えない感じもします。人も、県も、それぞれ違いがあるだけで優劣なんてないに決まっているのに、中々そうは考えられません。もしかしたら高校演劇の大会で優秀校を決めるというのも同じようなことかもしれません。楽しいアイディアがいっぱいの笑いに溢れたこの作品を見ながら、そんなことを考えました。

（多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科専任教員
FUKAIPRODUCE羽衣　作・演出・音楽）

もやもやを吹き飛ばした12上演

松山　正民

この数年、頭の中のもやもやは晴れることがなく、その鬱憤を晴らすかのような上演校のみなさんの舞台に、塞ぎがちだった気分は吹き飛んだようだった。観るものを圧倒する上演と、それを支えてくださったすべてのスタッフの方々に感謝するばかりです。

千早高等学校　「7月29日午前9時集合」

進んでやる気じゃないけれど、流れでやっている。そんな空気を３人が漂わせていて、どうしようもない日常というものを可視化させた舞台だった。学校をやめるというサガのメールに、思ってないことは言えないと、その場しのぎで済まさない姿や、「挨拶するぐらいの仲なのに、それなのに、ずっと心配してるんだよね」と、サガに自分たちの姿を見ていることを表しつつも、そこには彼らの優しさが詰まっていた。

秩父農工科学高等学校　「Brilliant Life」

みんながみんな自分の進路に確固とした考えを持っているわけではない。だから、自分から決めにいくというよりも、いろんな影響を受けて、何となく決まってしまう。そのことで揺れ動く生徒たちの内面が舞台から見えてきた。ヒヨリがＡＩのアイコに対してずっと言えずに抱いていた思いを伝え、その後に自分の進路に主体的になる姿は、クラゲのように潮の流れに身を任せてばかりじゃないぞと言うかのようだった。

大麻高等学校　「Tip-Off」

コロナ禍で高校最後の大会が中止になったことに端を発し、友人との間で生じた亀裂が広がっていく。その後諸事情でバスケットボールを続けられなくなり、友人に顔向けできなくなった主人公の心情がよく伝わっていた。周りの同級生たちの助けがあって、最後は変わらぬ友情を確かめ、再スタートを決意するのだけど、いつでもTip-Offでスタートを切れるんだという熱いメッセージはしっかりキャッチできた。

大谷高等学校　「なんてまてき」

先生から求められた反省文の代わりに、「魔笛」の構図を取り入れて書いた物語が展開される。主人

公が分身たちと自らの闇の中をさまよい、行方不明になった自分を探そうと、パワフルかつ縦横無尽に舞台を走り回る。存在感抜群の夜の女王、いかした分身たち、そして、ギャグと磨きがかかった台詞が重苦しくなりそうな舞台に観るものを引き込んでいた。「みんなの思考回路をジャックしちゃった？」と言うたみよの台詞通り、こちらは完璧にジャックされてしまった。

伊丹高等学校　「晴れの日、曇り通り雨」

相手に合わせようと放たれる言葉。軽く、どこか悲しさを漂わせる愛らしい愛と、どっしり構えて揺るぎない風の夏樹。２人の微妙なバランスを保ちながら交わされる会話に引き込まれていく。その軸にあるのは友だちって何だろうってことだ。相手に合わせてばかりなのは、自分に嘘をつくことだと愛は気づく。相手を理解しようとすることで、疑似友人関係が本当の友人関係に変わっていく展開が素晴らしかった。

三重総合高等学校　「ねえMAMA…」～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～

近未来の世界規模の巨大システムを舞台にした壮大な物語。生まれによる格差、貧困、女性差別。厳しい現実を乗り越えるかどうかは個人の自己責任だと押しつける矛盾にはらんだ社会。その矛盾によって犠牲になっている空気感を生徒たちが作り出していた。ラストで緞帳に映し出されたプロビデンスの目は物語の舞台になっている近未来とその先だけではなく、現在の社会をこそ見据えているようだった。

岐阜農林高等学校　「衣」

場面の切り替えがみごとで、舞台全体に広がる演劇部員たちと整列した実習の生徒たち、そして、軽快に動き回るマクワウリの先生と、まさしく舞台が躍動していた。コロナ禍で先を断たれ、背負っていた伝統をつなげずに挫折するゆうなと、伝統野菜と同じく、伝統も育てるものだと先を見つめたまゆ。二人の葛藤をもう少し見たかったけれど、人の心の強靱さとその裏返しの脆さというものを考えさせられた舞台だった。

松山東高等学校　「きょうは塾に行くふりをして」

リハーサルで役者が来ず、本番もという、あり得るんだろうかと思われる話でも、冒頭からリハーサルあるあるのミスを並べられることで、次々と致命的なミスが続く物語の展開にすんなり引き込まれていく。舞台上の役者たちにそれだけの説得力があったということだ。最後に助っ人のミナトが放った言葉に音響と照明が、そしてみんなが応え、劇はニセモノをホンモノにするんだということを素敵に観せてくれた。

栃木高等学校　「ＧＥＫＫＯ」

生物部員たちの際だった個性と彼らそれぞれがこよなく愛する生き物とがあいまって、ただならぬ世界が作り出されていた。彼らが生き物たちについて語る時、人間の有りようをも考えさせられるようだった。それにしても、こんなに悲しい恋の物語があっていいのかという思いとともに、こんなに素晴らしい友情の物語があってよかったという思いも残した舞台だった。

青森中央高等学校「俺とマリコと終わらない昼休み」

いじめは執拗にくり返される。被害者の苦しみはリセットされることはなく、受けた傷により苦しみは続く。「ミサイル落ちろ」「今すぐ終わっていい、こんなくそみたいな世界」はリコの心情をストレートに言い表していた。無言で、しかも奥まった位置にいながらも、その存在で舞台は張り詰めた緊張に覆われていた。リコに手が差し伸べられることで、彼女がミサイルの飛来願望を消すという象徴的な表現が印象的であり、かつ、それは私たちの心を直撃した。

三刀屋高等学校　「永井隆物語」

家族を、人々を愛する心は戦争を否定する思いにつながる。戦争は人々を傷つけ、命を奪うものだから。なのに、今も戦争は起こり、脅威に備えよと声高に叫ばれる。私たちは過去から学ぶことを苦手としているのだろうか。圧倒的な緑の存在感、群読、そしてモノローグが装置や照明、音響と共鳴して、この物語はそんな私たちにそれでいいのかと問いかけている。

日立第一高等学校　「なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？」

物語の全編を通して四人の個性がぶつかり合っていた。茨城多栄子がレンコンのかぶり物をつけたり、佐賀さんが埴輪と話したりと、こちらが楽しむ以上に、きっと舞台を楽しんでいたのだろう。魅力度ランキングなんかに翻弄されず、誰が何と言おうと、自分の信じる道をひたすら突き進む。その姿が痛快だった。自分は自分なんだよ、ということだよね。

（近畿高等学校演劇協議会顧問）

「暑い夏の熱い上演だった全国大会２日間」

川田　正明

高校演劇は、リアルかイメージか、等身大演劇もあれば壮大な架空世界を描く作品もある、実に多種多様な作品をひとつのテーブルに並べて審査する、とんでもない演劇世界です。全国大会まで来たのだから楽しんで演じればOK！という反面、国立劇場上演の切符を決めるシビアさも。正直言って荷が重すぎるなぁと思いながら審査に臨んだ東京大会でした。それでも約１年間、多くの時間と多くのエネルギーを費やしてきた上演校の熱意や労苦に対するできるだけの貢献をしたいと思い、キーボードを叩かせて頂きます。2700字では足りないな･･･詳しい感想をお聞きになりたい場合は高松桜井へお問い合わせください。

東京都立千早高等学校「７月29日午前９時集合」

「私たちの学校、都立千早高等学校偏差値は46程度の高校です」から始まる舞台は、自分たちの学校の実情をモチーフにした青春舞台。展開は会話のテンポよく、間もよく、しかも相手のことをほぼ忖度せずにポンポン飛び出す言葉群、「父帰る」「かえってくりゃいいじゃん」のような額面通りに言葉を受け取る姿は典型的Z→α世代をよく表現していたと感じます。今の格差をヤングケアラーや経済格差、学力格差から切り込んだ意図は十分に伝わり、社会に問いかけたメッセージを客席へ届けることに成功していたと思います。長い引用文をスラスラ読む学力は偏差値46を超えているな、とか若干のツッコミどころを残しつつも、等身大の今しかできない舞台は千早高校ならではのものだと思います。僕は進路指導部に所属してますが、「まともな仕事に付けないんじゃないかと不安になる」君たちに、他校ながらも理想を叶える進路応援をしたいと思わせる作品でした。

埼玉県立秩父農工科学高等学校「Brilliant Life」

AIのアイコとアイコを取り巻く６人の高校生たち。非常に人間そっくりな筐体を持ち、このような秀逸のアンドロイドが登場する舞台はいつなんだ？と電気工学部出身の僕は関心深く見ました。LINEチャットのやり取りアリ、柱に浮かび上がる文字アリで転換もスムーズ、いいスタッフワークをしているな、と思いました。物語は同一の志望校、同一の就職先に集まってしまう悲劇をコメディータッチで描いています。客席から起こる笑いからしてもその試みは成功していたのではないでしょうか。芝居も終わる頃「～。アタシさ、アイコになるよ」とヒヨリのセリフ、多様な受け取り方ができますが、2045年にシンギュラリティが予測される今、ヒヨリが生身の人間からAIを搭載する人間になりたいと微塵でも考えたのであれば、複雑な思いを抱かせる作品でした。

北海道大麻高等学校「Tip-Off」

卒業生が母校に集まり、コロナ感染症流行下での高校生活を振り返る、全国津々浦々の高校でリアルに展開されている出来事です。修学旅行がなくなり、総体がなくなり、総文祭もなくなる。そんな時代の中で代替大会に注目し、同一試合に京介と浩太が出られない禍根が話の核になっている（と川田は思ってます）ことには、目の付け所に意外性があるなと思いました。高校卒業後もお互いにバスケを続けるはずが、京介の事故と浩太の実家の店の行き詰まりで不可能になってしまい、その結果生まれるわだかまりを環や小百合、明日香が解かすという物語になってます。そうなるとドラマの盛り上げとして、”浩太のせいで京介はバスケができなくなった。なのに浩太はバスケを辞めた”、もしくはその逆パターンの要素を入れてほしかったなと感じました。物語性を大切にしている本作には、友情の魅せ方のギアをとことん上げてくれたら嬉しいなぁと思いました。

大谷高等学校「なんてまてき」

鹿下野の校則違反反省が、イメージで攻めまくるファンタジーとなって怒涛のように客席に押し寄せる極めて挑戦的な作品です。さすが大阪、少々セリフが聞こえなかったり、人物の感情をさらけ出す叫び声は、「舞台では叫ばない方がいい」とか「長すぎるセリフは分割する」といった教えをてんで気にすることなく、自分の信じる道を行く！というアイデンティティが確立してて素敵です。スタッフワークは極めて秀逸、何十？何百（言いすぎですか？）ともあろう照明転換をスモーク効果も相まって軽々しくこなしていく様子には感心させられました。先生と同感で、盛らずに反省文が書ける、この１時間で成長した鹿下野さんに再会したいと思いました。

兵庫県立伊丹高等学校「晴れの日、曇り通り雨」

「先輩！ご卒業おめでとうございます！」から始まる恋バナかと思いきや、愛をめぐる友達関係をモチーフにしたヒューマンドラマ。ならば舞台は卒業の日でなくとも･･･と言いたいところですが、愛の晴れの日は、卒業のような特別な日がきっかけであることがふさわしかったのかもしれません。何度か繰り返される「中村愛の通常運転」の独特の言い方が、どこかおどけた愛のキャラクター性を象徴しているかのようでついつい耳に残り、人物描写のスパイスになっています。一の敬語もついつい取れて、物語の進行と同時に３人の交流が深まっていく様子をさりげなく描いているところも秀逸でした。夏樹が愛に名付けるコードネーム、Freesia。その花言葉の意味を観劇者に調べさせる力があるとしたら、本作品は成功していると言えるのではないでしょうか。舞台でも映画でもアニメでもそうですが、あの登場人物に会ってみたい、あの人はこの後どうなっていくのだろうか、と感じさせることができればある意味、制作者の想いは伝わっているのかなと思います。夏樹にフリージアの色が聞いてみたい、１年後の中村愛と話がしたいなと感じた作品でした。

大分県立三重総合高等学校「『ねえMAMA･･･』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～」

世界統合政府が地球民を管理するという近（遠？）未来のファンタジー。ならば民主主義国家と強権主義国家の争いは、強権主義国家の勝利に終わったと示唆することを考えて創作したのであれば、大したモノです（日本国民にとっては大惨事ですが）。幕開けから見せつける近（遠？）未来的な舞台装置は圧巻でした。鮮やかな舞台転換を難なくこなしていくスタッフワークも抜群です。賛否両論分かれる様式的オーバー演技は、フィクション効果を計算してのことなのでしょうか。ただ、生まれてから死ぬまでの行動がクラウドにUpload（背景から考えてリアルタイム処理ですよね？）されるのであれば、劇中の会話自体が危ないのでは？と心配してしまいました。未来を警告する野心的な取り組みに拍手を贈ります。

岐阜県立岐阜農林高等学校「衣」

全国津々浦々の高校で起きたと思われる青春ストーリー、モノローグを時折挟みながら進行する舞台に心地よさを感じました。意図的に様式的演技と実感情的演技を交錯させて、ラストに導く手法は熟練されているなぁ、と思いました。仲間か勝利か、伝統を守る？高校演劇は誰のために何のためにするか、という問いかけは、忘れかけたかもしれない上演するという原点について考えさせる機会を与えたと思います。「･･･私の中の、糸が･･･、切れた」、高校演劇に携わるほとんどの人が感じることかもしれません、部員もそして顧問も。いつまでも、また会える仲間同士でいれるといいですね。

愛媛県立松山東高等学校「きょうは塾に行くふりをして」

洗練された動き、セリフ、セット。ちょっと非のつけどころが見つかりません。脚本を読んだときはどんな舞台になるんだろ？と思いつつ、上演を観ると、立体化し

た作品の完成度に感嘆しました。キャラが立ち、この人ならこのセリフ言う言う、と言った印象。コテコテな劇中劇も先が予想できて、キターという感じで安心安定を客席に与えます。スローモーションと早送りの組み合わせも絶妙で笑いを誘いました。「ぜんぶ偽物なのに、全部本物なんですね」のフリから、「なんとかならないんですかね神様！」に続くミナトのセリフが、願いを本物に変える神様に。その返答が音響のサクラであることも心憎いです。いろいろ書いてもとにかく秀逸な作品でした。

栃木県立栃木高等学校「GEKKO」

僕は理学部の顧問もしていますが、いるいるこんな生徒！と感じながら見てました。冒頭にあるように美月へのスペクタクルロマン活劇＝恋バナ。となると美月への恋の要素がもっと盛り込まれてもいいような気がします。カマキリの交尾がGEKKOの恋要素と言ってしまえばそれまでですが。しかし、それらのエピソードがJKへの欲望を表していることはよく分かり、男子校ならではの作品でした。「なんかちょっと･･･馬鹿にされてるような気がする」とモリヤが言うように、美月の死に対するモジ君の行いにはちょっと違和感を感じるところも。ラスト、舞台中央から光を放つ満月、叶うことなら生きた美月とGEKKOを逢わせてあげたかったですね。

青森県立青森中央高等学校「俺とマリコと終わらない昼休み」

モチーフはミサイル・コロナ、ストーリーは昼下がりの学校、テーマはスクールカーストに伴ういじめと振り分ける緻密な作品でした。リピートされる昼休みによって強権主義国家による戦争への警告かと思いましたが、作為的なミスリード作戦にはめられました。モチーフを巧みに使い、サブプロットを効果的にメインプロットのように印象付けた成功例と言えるのではないでしょうか。聞かさなくてもいいセリフと聞こえさすべきセリフを分類し、イメージでも攻めていく作品構成は見事そのもの。「早くミサイル落ちろ！ミサイル、来い！」と叫ぶリコの姿に、生徒にとっての世の中は学校なんだ、と強烈に印象付けます。リピートを重ねるたびに生じる変化、リコの意思によってその変化が生じます。Change The World、そんなふうになったらいいですね。巧みな構成に喝采を贈りたい舞台でした。

島根県立三刀屋高等学校「永井隆物語」

永井隆ひとりではなく、緑やカヤノ、マコトら登場人物一人一人にスポットを当て、圧倒的力量と技巧的な舞台演出で魅せた群像劇。「～。誰にも伝わらないもしれません。～」との群読とは裏腹に十分すぎるほど永井隆の一生が伝わりました。隆の生い立ちを調べ上げ、適切な取捨選択を施して舞台化した作品は破綻のない優れたものに仕上がっていました。米国の衰退と中国の台頭で戦後の日米モデルの継続は困難になり、ロシアのウクライナ侵攻で決定的となった今、何が日本に資するのか、考えさせる機会になった作品であるような気がします。

茨城県立日立第一高等学校「なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？」

魅力度ランキング最下位を逆手にとった自虐ストーリー、コテコテ演技とステレオタイプを活かした先が読めすぎる展開で楽しく舞台を観ることができました。脚本と脚本が要求する演技の質がマッチしていて妙にしっくり、リアルを吹き飛ばした潔い演技・演出にも納得させられました。全体を通して典型的ギャグのノリに終始するのかと思いきや、No.1だから作るのか？好きだから作るのか？レンコンづくりの動機の親子の琴線に触れる会話や性善説に基づく多栄子のようなキャラクター造形などのスパイスがさりげなく織り込まれていて、一時間客席を飽きさせることのない作品に仕上がっていたことに拍手を贈ります。

（香川県高等学校文化連盟演劇部会副部長／香川県立高松桜井高等学校演劇部顧問）

なんてすてき！

上田　美和

この度の開催地東京の皆様のご尽力に、心から敬意を表したい。「なんてすてき」な三日間だったことか。

■東京都立千早高等学校『７月29日午前９時集合』

登場する３人の高校生には、自分が通う高校への軽侮と、自己の境遇への諦めがある。会話の内容に連続性はなく、深まりもしない。この散漫な会話こそが、この舞台の核心である。あえて触れないのだ。彼ら３人は家庭の悩みを、互いにさほど打ち明けない。彼らが探していた脚本を上演するはずの、文化祭だって中止になる。「報われなさ」をさらりと描いた。タイトルにすら意味はないと言い切る。共感は不要と突き放すみたいに。短い台詞の自然な応酬が素晴らしかった。

■埼玉県立秩父農工科学高等学校『Brilliant Life』

赤茶けた大きな壁は、教室空間に異質なものが入り込んでいる象徴と見た。異質な者とはＡＩ、アイコである。アイコの持つ未来予測の解析力を用いて、アイコが仲間達の進路選択の不適性を見抜いて反対するなどしたら、ドラマにうねりが生まれたかもしれない。

仲間全員が望んだＢライフ社への校内選考が誰一人叶わず、いわゆる勝ち組の生徒が手にした結末は、レールに乗らずにそれぞれの場所で輝けというメッセージと捉えた。舞台美術と照明効果が印象的であった。

■北海道大麻高等学校『Tip-Off』

色味を抑えたパステルトーンの壁が、それぞれの登場人物の衣装の色とも調和していた。爽やかで素敵な物語。柔和で自然な会話に、浩太と京介の心の距離を再度縮めようとする周囲の温かさが滲んだ。台詞で進む劇なので、言葉の精選には工夫の余地があるかもしれない。コロナ世代が失ったものの大きさを、３年後に振り返って見る。しかしまだ先がある。未来への希望を、最後の躍動感あるバスケのシルエットが象徴した。同じ経験を持つ我々へのエールとも受け取った。

■大谷高等学校『なんてまてき』

鹿毛野が切望する母からの愛。しかし現実の母からは、何度許しを請うても決して許してもらえない。テーマは孤独だ。空想好きの少女が、反省文の代りに提出する、奇想天外な「魔笛」の物語。関西弁の軽快な演技の中に、許されない自己への否定や矮小化が滲む。幻想的な舞台を縦横無尽に走り、跳ね、悶絶し、叫び、役者みんなで鹿毛野の悲しみを全身全霊で演じた。台詞が聞き取りづらかったことが残

念である。先生は聖母の象徴だ。先生の赦しに鹿毛野の救いを見る。

■兵庫県立伊丹高等学校『晴れの日、曇り通り雨』

卒業式という「晴れ」の日、二人の少女が出会う。出会い方が面白い。引っ越しを控えた愛が寂しさのあまり声をかけた、行きずりの相手が夏樹なのだ。途中で出てくる一が二人の距離を近づける。一人だけ少し意地悪な役の小林さん。この役を一年間練習し続けたことを讃えたい。舞台奥に花壇が広がる。こんな舞台配置は珍しい。感性豊かな短い台詞によって、契約友情から真の友情が始まるまでを丹念に描いた。展開に少し無理はあるが友を求める心が伝わってくる良作。

■大分県立三重総合高等学校『ねえMAMA…』～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～

百年後の高校。現代の格差社会をさらに極端にした世界が、効果的な音響や映像、スペースを四つに区切った段差のある舞台装置の中で、熱演された。近未来のイメージは具体的で、作者の現代社会への風刺がある。いくつかの家族の問題が提示され、悪役に見えていた雪村先生の力強い最後の台詞に、勇気づけられた。

描かれた百年後の管理社会が強大だけに、現状打破の方策が現代と同じく見いだしづらかったが、近未来世界に果敢に挑んだ三重総合高校に拍手を送りたい。

■岐阜県立岐阜農林高等学校『衣』

かけがえのない部活の青春の思い出が、実ははからずも部員の一人が退部して欠けてしまったという苦い悔恨によって、チクリと心痛む思い出と重なっている。

素舞台からいつの間にかファーストフード店の椅子テーブルが現れて、それが今度はファミリーレストランの椅子テーブルに変化する。それが消えると今度は畑に。場面転換だけでも、猛練習の跡が見える。伝統を引き継ぐとは、大変なものだ。蚕と糸と衣をキーワードに、「引き継ぐ」ことの責任の重さを表現した。

■愛媛県立松山東高等学校『きょうは塾に行くふりをして』

ミナトくんが飄々としているのがよい。彼が演劇部の営みを俯瞰することにより、観客は彼の視点で、（何と我々は日々、演劇なんて涙ぐましいことを、必死こいてやってるんだ）と、身につまされる気がしたろう。

リハーサル中の「舞台」が舞台なので、結果的に観客までが作品の一部になった。押し寄せるトラブルに笑いは尽きない。絶妙なキャスティング。ラストの盛り上がり。ミナト君の「劇場は、全部偽物なのに、全部本物」･･･人間の息遣いのことだろう。良質の喜劇。

■栃木県立栃木高等学校『GEKKO』

歯切れのよい台詞と巧みな伏線。行き届いたストーリー展開。中央の水槽で、一目で生物部部室と分かる。

役者がみな魅力的。男子校で、下ネタも含めた小ネタが炸裂する。腰振りダンスをやりきったカマキリ先生に拍手。講評でも言ったが、せっかく生物部なんだから下ネタも生物部ネタにすればさらに面白かったかもしれない。モリヤの美月への思いがひたむきで、ラストの海岸の月光が美しかった。モリヤ（ヤモリ）の学術名がGEKKO（月光）。…語感のなぞらえが見事だ。

■青森県立青森中央高等学校『俺とマリコと終わらない昼休み』

ミサイルの爆撃で、何度も死ぬ主人公たち。ループする教室の中で、皆が好き勝手に喋る冒頭から、少しずつ同じシーンの違う部分を切り取る演出が巧み。観客の目に徐々にクラス内のカースト制、いじめの問題が視覚化されていく。リコの絶叫が悲痛で哀切だった。

周囲から黙殺されているマリコが、ガクトによって本名の「リコ」として認識されたとき、ループが解かれ、終わらない昼休みが終わる。人は人を救える。同じ世界を巧みに演じ分ける役者達の表現力の確かさ。

■島根県立三刀屋高等学校『永井隆物語』

細い枠組みの抽象的な三角形の造形を中央に配した舞台。その造形はある時にはレントゲンの機器にも見え、ある時には天主堂にも、ある時には原子配列にも見える。朗読劇のように整然として、要所要所は形を崩し、演じる。役者全員の佇まいに品があり美しく、一人の人間と家族の悲しい運命と、希代の残虐行為を伝えることへの使命感に満ちていた。舞台が美しすぎて原爆そのものまで浄化されて見えた感もある。音響や照明、舞台美術のチームワークが圧巻。高邁な舞台。

■茨城県立日立第一高等学校『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

東京一華と大阪夏希の圧倒的勝ち組感。迎え撃つ茨城多栄子と佐賀佳乃のいかにもランキング低げな感じ。とんでもないストーリー展開（都道府県魅力度コンテストの結果が自分の価値！）。とんでもない演出（病人が自ら自分の寝ていたベッドを高速撤去！）。

役者全員が魅力的で上手で、楽しんで演じていることが心底伝わり、目が離せなかった。グラグラのハイヒールで特訓する所などは笑った笑った！佐賀県の先生方が泣いて喜んでいた。高校演劇の醍醐味を見た。

（鹿児島県立伊集院高等学校演劇部顧問）

第１分科会　　演技①　「集中と拡散」

講師 山崎　美貴

演技①では、楽しく集中と拡散を同時に行う力を身につけるために、ウォーミングアップのあとにシアターゲームを行いました。有名なものもありますが、以下に行ったものを紹介します。

①　ジップザップ

円になりジップを右の人、ザップを左の人に渡していく簡単なシアターゲームであるが、相手にきちんと渡す、受け取るという演技の基本が含まれており、集中して行うよう助言をいただいた。

②　００７

円になりゼロ→ゼロと首を動かすことによって隣の人に言葉を渡していき、２回目のゼロを受け取った人はセブンと言った後にバキューンと人を撃ち、撃たれた人の両隣の人が両手を挙げるというもの。こちらも定番のシアターゲームであるが、きちんと相手を見て撃つ、受け取った人と両隣の人は即座に反応することができるように集中することが大事であるという助言をいただいた。

③　１２３４５６７８

円になり１２３と順番に言っていくが、４の人は４といわず首のみを動かして隣の人に渡す。また５の人は足をあげて隣の人に渡す。８の人は腕を曲げて８の数字を作る。慣れてきたら４・５・８の人は首の向きやあげる足の向き、上にあげる腕の右腕・左腕を変えて右回り、左回りをかえてもよい。さらに４のつく数字と４の倍数とゾロ目が回ってきたとき「トゥー」という（４、８、11、12、14…）

④　エアーバレーボール大会

はじめてあった人同士でチームを作り、名前を決める（果物、野菜、中華料理、ケーキの種類など）レシーブ、トス、アタックするときに人の名前を呼んでボールを渡し、アタックを打つ人は、相手チームの人の名前を呼んでアタックを打つ。

⑤　お話づくり

15人×２列になり、即興でお話を作る。順番にお話を発表していき、向かいに座っている人は、その発表とまったく同じ発表が再現できるように身振り、手振りも含めて暗記する。また、周りの人はその発表を聞いているときの態度（笑ったり、隣の人としゃべったりという反応も含めて）を完全に再現する。向かいに座っている人が再現を行い、実際に発表した人がまったく同じ発表ができているか判定する。できていなかった場合は、演技指導を行う。

※もし暗記できていない場合はアドリブでやってもよい。役者はセリフや動きを忘れたときの柔軟性も大事である。また、演出にその動きをもう一度やるように言われることもある。自分がどのように動いているか、あたまとこころを使って集中して日ごろから稽古することが必要であるという助言をいただいた。

（文責　中央大学附属高等学校 川北　慧）

第２分科会　　演技② 報告　「目に見えないもの」

講師 糸井幸之介

「目に見えないものを検証してみよう」という内容であった。まず５名６チームに分かれた。参加生徒が29名だったため、急きょではあったが教員審査員の上田先生も参加された。糸井先生はとても紳士的な振る舞いでファシリテートされていた。

６チームの２チームがＡ・Ｂにわかれ、お互いに目力を送り、誰が思いを受け取れるかという試みをおこなった。「目の形を変えない。合図は送らない。ポイントはポジティブなイメージを送ること」と糸井先生がアドバイスをした。20秒ずつ見つめ合い、ローテーションで自分が誰から目力を送られているかを見極めていく。答え合わせの方法はいわゆる「ねるとん方式」でおこなわれた。目力を送ったと思う人のところに行き、手を伸ばし該当すれば成功という流れだ。成功した時の盛り上がりは言うまでもなく、出場校の生徒や参加生徒はとても楽しそうであった。肝心の成功率はまちまちであったが、確率以上の結果であった。糸井先生はどうやったら成功率が上がるのかを生徒たちにアイディアを出してもらったり、対話してもらったりしながら進行されていた。時間を思い切って減らしてみる試みをした。すると不思議なことに成功率が上がった。生徒はポジティブなイメージを送っただけで成功することを不思議に感じながら「目に見えない力」を実感していたようだ。

次に「オーラを察知する」という試みをおこなった。先ほどのチーム５人が均等の間隔で散らばる。その間を別のチームの５人がその間をこの人と決めた人にオーラを送りながら歩き回る。初めはなかなかうまくいかなかったが、糸井先生は「心をざわつかせず、ポジティブなオーラで」とアドバイスされた。他にも「人差し指を触れて気持ちを伝える」という試みをおこなった。終始大変盛り上がっていた。時間も迫り、糸井先生のまとめがあった。「舞台上、客席には目に見えない力が意味として動いている。そのようなものを大切に扱ってお芝居を作られると良い」とのことであった。生徒たちにとって忘れられない経験になったと感じた。

（文責　日本大学鶴ヶ丘高等学校 村山　大輔）

第３分科会　「演技演出講習会の報告」

講師 鴻上　尚史

「これから正しい発声とは何か、をやるぞ。みんな舞台に上がるぞ。それ、あがれいっ！」たちまち大ホールの舞台が200名近い高校生たちで埋まった。以下、講習の主な内容です。

「うまい演技」とは「ナチュラルな感情」と「意識的な表現」を同時にできること。以前大会で、嬉しいと側転するという芝居をする生徒がいて、「何でそういう芝居をやったの？」と聞くと「先輩がそうやれと言ったからです」、「君はうれしい時側転するの？」「しません」「じゃあ、なんでやるの？」「先輩が言ったから」。形だけになっていないか、「嬉しい」というナチュラルな気持ちがキープ出来ているかを考える。「できません」「これは不自然です」と演出に伝えることも時には大切。「役者が演出家を育てる」という面もある。

「正しい発声とは」の前に、「どんな声を理想としているのか」をまずは考えること。理想のイメージがないまま技術論を聞いても無意味。（ここから実習）生徒がペアになり一人は仰向けに寝転がり手のひらは上向きに。「気を付け」を姿勢はダメ。目を閉じて鼻からゆっくり（1.2秒）吸って、口からゆっくり（10秒くらい）で吐く。パートナーが横に座り、呼吸の度に動く部分を触って伝える。「丹田」という、臍の下に親指を置いたときに小指が来る部分が盛り上がるのが理想的だが、そういう人はほとんどいない。続いて全員が寝転がり、カウントに合わせて「スー」と息を出し、苦しくなるちょっと前でやめる。目指すべき長さは20秒。秒数を伸ばすためには横隔膜を下げて息をたくさん身体に入れる。一人が正座して両手を突き出して前かがみになる。（祈りのようなポーズ）パートナーがおなかの横や腰の後ろの部分に手を当てて、そこに空気を入れて膨らませるようにする。次に普通に座っておなかの前側だけでなく横や後ろ側も膨らますように息を入れる。続いてに身体に入れた空気を共鳴させて声にする実習。共鳴させる部分は鼻、口、頭、喉、胸、の五箇所で、共鳴部分に手を当てながら「ンー」と発声し、響きを感じられるようにする。パートナーが五箇所にランダムに手を当て、そこを響かせられるようにする。五箇所出来るようになったら肩や背中（上、中、下）にも手を当て、そこも響かせられるようにする。呼吸や発声はスポーツの素振り練習のようなもので、楽しくはないかもしれないが毎日やって身体に覚えさせる。バスの中とか信号待ちの時とかやれる時間や場所を見つけて毎日やる。自分のイメージや感情をちゃんと表現できる声を持つことが大切。自分がどんなイメージや感情を表現したいのかを考える。自分のクセを自覚する。クセは無意識的だが表現とは意識して行うもの。発声練習の際には、どこに向けて、どのくらいの範囲で声を出すのか意識する。（例えば「アエイウエオアオ」ではホワイトボード全面に、「カケキクケコカコ」では床に置かれたペットボトルのキャップに向けて、などと）今日の話や話しきれなかったことは「発声と身体のレッスン」（白水社）に書いてあるので図書館に入れてもらって読んでください、とのこと。　密度の濃い90分でした。

（文責　拓殖大学第一高等学校 市村　益宏）

第４分科会　　舞台技術創造講習会　〈報告〉

今回の舞台技術創造講習会では、1996年初演、渡辺えり作「深夜特急　めざめれば別の国」を約10分程度に改訂した脚本を使用して、講習が行われました。なお、講習会で上演する演目の演出及び演技指導は舞台美術家の長田先生に行っていただきました。４名の生徒がキャストとして参加をし、長田先生をはじめ全国事務局の先生方からもご指導いただき、舞台技術のみならず演技の基礎についても学ぶ機会を得ることができました。

【道具制作講習会】

事前に行われた道具製作講習会では、講師の先生のご指導のもと、舞台技術創造講習会に使用するセットを作成しました。舞台美術家の土屋先生がこの講習のためにデザインしてくださったイメージに沿って、ターポスクリーンやダンボール、ビニールなど、比較的安価かつ手に入りやすい素材を用いてセット作りを行いました。また、道具制作講習会の２日目には、金井大道具さんにも来ていただき、日頃の部活でも十分に活用できるコロコロスポンジを用いての着色方法について学ぶことができました。レンガや岩、植物などのそれぞれの質感の出し方、陰影のつけ方などが簡単にできる方法について実演していただき、実際にその方法で講習会に使用する装置への着色を行いました。

【舞台技術講習会当日】

舞台技術講習会では、「深夜特急　めざめれば別の国」の素バージョン、音響・照明を入れた完成バージョンの順に上演があり、その後、それぞれのセクションのプラン解説が行われました。

舞台美術講習では土屋先生より、まず、脚本に描かれたドラマに寄り添い、美術も共に演技をするつもりでイメージを膨らませること、そしてそこで生まれた演劇的な必然性に基づいて装置を作成することが重要であるとのお話がありました。実際の装置作りに関しては、身近にあるもの、手頃に購入できるものをいかした手法についてご指導いただきました。また、ラテックスという普段あまり高校生に馴染みのない素材について詳しく説明していただく中で、素材の特徴や効果について深く知ることにより工夫に富んだ舞台装置の作成が可能になるということを教えていただきました。

照明講習では、講習会に参加した生徒が実際にオペレーションに参加させていただきました。上演終了後は、乳原先生からそれぞれのシーンの照明について解説をいただきました。同じような色合いであっても微妙な温度の差があることや、光の角度による見え方の変化等について詳細に説明いただきました。また、カラーフィルターの種類についてもお話いただきました。

音響講習では、藤田先生より音響効果によって空間に立体感を持たせることの重要性についてお話がありました。今回の劇ではSL列車がやってきて、最終的に空に昇っていくというシーンがあり、会場内に設置された12個のスピーカーを駆使して生み出される、舞台から客席に向かって本当にSLが走り抜けて行くような臨場感に多くの参加者が感動している様子でした。

今回の舞台技術講習会及び道具制作講習会を通して、普段の学校内の部活動では得ることのできない貴重な学びを得ることができました。舞台監督の吉木先生・山本先生、その他アシスタントの先生方にも大変お世話になりました。改めまして講師の先生方にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。

（文責　立川女子高等学校　角田　奈月）

第５分科会　　生徒講評合評会　〈報告〉

（1）東京都立千早高等学校『7月29日午前９時集合』

みんな何かを抱えており、真正面からそういった誰かの問題を受け止めていられるだろうかと、希薄になりつつある人間関係について考えさせられた作品でした。

（2）埼玉県立秩父農工科学高等学校『Brilliant Life』

就職や進路のことで悩みもめる彼らの姿に、どうすればブリリアント＝「輝かしい」人生を送ることができるのか考えさせられました。最適解は自分の手で選び取るべきだと思わされた作品でした。

（3）北海道大麻高校『Tip-Off』

コロナウイルスを引き金として起きてしまった葛藤や衝突が、私たちそれぞれの体験と重なり強く胸を打たれました。ラストのTip-Offのシルエットのように、私たちも前を向いて生きていきたいと思えました。

（4）大谷高等学校『なんてまてき』

そばにいてくれる人や味方になってくれる人は、たとえ家族ではなくても、想像上であっても、周りにたくさんいるということを教えてくれた作品でした。

（5）兵庫県立伊丹高等学校『晴れの日、曇り通り雨』

ともだちの定義は千差万別である。価値観の違う愛と夏樹と一が距離を縮めていく様が、天気の変化を通して描かれていくことに、心が温まりました。

（6）大分県立三重総合高等学校『ねえMAMA ～羊群に紛れる猫と、猿山を見上げる犬～』

現実を嘆くだけではなく、宗教、歴史、政治、哲学などの要素が存分に織り込まれ、固定観念に捕らわれずに考えて行動したいと強く思った作品でした。

（7）岐阜県立岐阜農林高等学校『衣』

自分たちとマクワウリを重ねることで、伝統を受け継ぐことの本質を考えさせられました。糸を思わせる表現が多用され、過去と未来、そして、ゆうなとまゆが繋がって一本の糸になったようでした。

（8）愛媛県立松山東高等学校『きょうは塾に行くふりをして』

空間を巧みに使った舞台に、観客の心を笑いと涙で揺さぶって劇中劇を表現する演技力の高い作品でした。演劇を知らないみなとがラストには声を出して手を振る姿に、演劇の力を改めて感じさせられました。

（9）栃木県立栃木高等学校『GEKKO』

亡くなった人たちも私たちの思い出の中で生き続けるということが、ラストの月の光や雪などの表現を通して描かれ、モリヤが前向きに生きていけるのではないかと予感させられました。

（10）青森県立青森中央高等学校『俺とマリコと終わらない昼休み』

いじめに対抗するためにミサイルを落とすという発想はまさに戦争であり、あと八分でミサイルが着弾するという状況下で必死に幸せを得ようとするガクトにこの瞬間を大事にしなければと思わされた作品でした。

（11）島根県立三刀屋高等学校『永井隆物語』

無知であることの罪を感じたことで、私たち一人ひとりが戦争を他人事とせず、平和の大切さを後世に伝えていかなければならないと思わされました。

（12）茨城県立日立第一高等学校『なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？』

ランキングによってクラス内での順位が決まってしまう高校生たちの悩みを通して、魅力とは何かを考えさせられました。一番大事なことは自分の『好き』を誇りに思うことだと気付かされた作品でした。

事務局通信

３年ぶりに一般観客を入れた全国大会が、サブカルチャーの聖地・なかのZEROで行われました。その日程にあわせて、今年度第１回常任理事会と理事会が行われました。

平林正男新会長から挨拶の後、前年度事業報告、決算報告に続き、今年度事業計画案、予算等の協議が行われました。

予算については、加盟校の減少、年間協賛や協賛広告等による収入の減少、物価高騰による会誌や活動報告集の印刷費の上昇により、繰越金が昨年度から大幅に減少しており、このままでは、協議会の運営が厳しい状況であることが会計担当より報告されました。

今年度の東京大会は、12校の上演の後、特別支援学校による15分の上演が行われることや公演中の座席の対応等が報告されました。来年度の鹿児島大会について、日程や会場についての報告と出場校打合会を５月下旬に予定していることが報告されました。鹿児島大会で1977年千葉県から始まった全国総文祭が全ての都道府県で開催されたことになります。再来年度、全国２周目最初の開催地にあたる岐阜県からは、日程や開催予定会場等について報告がされました。

第17回春季全国大会は、2023年３月24日（金）から26日（日）まで大分県大分市のJ:COMホルトホールにて開催されます。運営人数が少ない中でも、しっかりとした舞台を提供できるように準備を進めているとのことでした。上演日程の詳細については、今後、全国高演協のホームページ（http://koenkyo.org）に情報を掲載していく予定です。第18回開催予定の福島県からは、当初開催を予定していた福島市内の会場が３月16日夜に起きた福島県沖地震により、使用できなくなってしまい県内の別会場で今後開催の準備を進めていくことが報告されました。第19回は広島県福山市を予定しております。現在、春季全国大会は各都道府県の立候補によって開催されています。2006年に試行大会から始まったこの大会も回を重ね、本協議会の事業として定着をしてきました。今後も候補地の立候補について募集を続けつつ、新たな開催地の決め方について、今後意見を求めていきたいと考えております。

その他、全国大会の参加資格の確認や舞台配信に関する著作権の確認がされました。インターネット等を使った舞台配信では、音楽著作権をとるように注意喚起がありました。

今後も高校の演劇活動の更なる発展に向けて、全国の皆様のご声援をお願いいたします。

（事務局　加藤　悟）

2021年度　全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
基本収入	会費	1,980,000	1,945,000	1,000円×1945校分
その他の収入	活動報告広告	425,000	380,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	90,000	80,000	「演劇創造」広告掲載料等
	芸文振より	4,042,000	4,846,000	各ブロック大会への補助
	高文連より	150,000	150,000	高文連より活動補助・旅費
	利息	35	72	ゆうちょ銀行・みずほ銀行
繰越金	前年度より	4,177,503	4,177,503	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	600,000	930,000	四国学院・桐朋芸術短大・NHK
合　計		14,464,538	15,508,575	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	1,800,000	2,017,160	和歌山・大阪　事務局会議旅費等
	役員派遣費	200,000	152,000	役員派遣
	会議費	80,000	50,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	150,000	94,887	切手、送料、ファクス等
	印刷費	100,000	55,344	賞状、封筒等
	消耗品費	50,000	12,613	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	30,000	32,808	zoom、謝礼等
事業費	会誌発行	1,100,000	1,076,552	演劇創造144・145号、発送費
	ブロック連絡費	10,000	3,280	各ブロックへの振込費用等
	活動報告集	900,000	1,299,540	各都道府県活動報告集
渉外費		50,000	2,750	全国大会関係・弔慰金
大会運営費	ブロック大会	4,042,000	4,846,000	芸文振からの助成金（各ブロックへ補助）
	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金（各ブロック25万円）
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援
	舞台技術講習会	400,000	243,796	舞台技術講習会補助
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,662,538	0	
合　計		14,464,538	12,776,730	

2,731,845（2022年度一般会計へ）

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	989,433	前年度繰越金
合　計		2,289,433	2,289,433	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
大会運営費	出場校補助	300,000	270,000	出場校運搬費補助（30,000×9校）
	運営費	1,000,000	1,057,250	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	989,433	0	
合　計		2,289,433	1,327,250	

繰越　　962,183（2022年度特別会計へ）

2022年度　全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
基本収入	会費	1,945,000	1,945,000	1,000円×1945校
その他の収入	活動報告広告	380,000	400,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	80,000	80,000	「演劇創造」広告費
	芸文振より	4,846,000	2,000,000	芸文振からの助成金
	高文連より	150,000	150,000	役員旅費・運営費
	利息	72	72	ゆうちょ銀行
繰越金	前年度より	4,177,503	2,731,845	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
		930,000	930,000	四国学院・桐朋学園・NHK
合　計		15,508,575	11,236,917	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,017,160	2,200,000	東京・大分　事務局会議旅費等
	役員派遣費	152,000	200,000	役員派遣
	会議費	50,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	94,887	120,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	55,344	80,000	賞状、封筒等
	消耗品費	12,613	30,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	32,808	40,000	zoom、謝礼等
事業費	会誌発行	1,076,552	1,100,000	演劇創造146・147号、発送費
	ブロック連絡費	3,280	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	1,299,540	900,000	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	2,750	50,000	全国大会関係・弔慰金
大会運営費	各ブロック大会	4,846,000	2,000,000	芸術文化振興会助成金（各ブロック25万円）
	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金（各ブロック25万円）
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援（東京、チラシ5万円含）
	舞台技術講習会	243,796	400,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,731,845	1,136,917	
合　計		15,508,575	11,236,917	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	962,183	前年度繰越金
合　計		2,289,433	2,262,183	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
運営費	出場校補助	270,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,057,250	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	962,183	962,183	
合　計		2,289,433	2,262,183	

お知らせ

コロナ禍の中、高校演劇も新たな一歩を踏み出しています。第68回東京大会は、佐賀大会以来３年ぶりに一般の観客をいれての開催となりました。無事に終了することができたのは、開催地の先生や生徒をはじめとするスタッフ皆様の周到な準備のおかげです。本当にありがとうございました。

さて、大会と並行しておこなわれた理事会では、2021年度決算と2022年度予算案が審議され、可決承認されました。

私たちの日頃の活動を支えて下さっているのは、民間支援団体の皆様の協力があってのことです。特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学などの各支援団体様に心から感謝を申しあげます。

９月23日（金）0:30～2:30（再放送は11月５日（土））ＮＨＫ Ｅテレにて「青春舞台」が放映されました。各校の活動や大会の様子、また最優秀校の上演が放送されました。